学習院大学史料館
ミュージアム・レター
Gakushuin University
Museum of History
Museum Letter
No.36
発行日 ● 平成29年(2017)9月15日

もくじ

ごあいさつ・辻邦生展開催に寄せて…… 1
辻邦生展における琵琶展示…… 2～3
パリ・ストラスブール・東京巡回展・講演会のお知らせ…… 4

昭和33年(1958)頃　リュクサンブール公園にて
右から2人目　辻邦生、3人目 佐保子

ごあいさつ

学習院大学史料館では、辻邦生基金等を活用して、本学に在籍された辻邦生先生に焦点をあてた展示企画を年度ごとに工夫展開しています。平成29年(2017)度は7月18日から8月11日まで、「永遠の光(アルカディア)―辻邦生『夏の砦』を書いた頃」というミニ展示を史料館にて催し、7月22日に百周年記念会館で講演会(講師・加賀乙彦氏「辻邦生の出発―『夏の砦』」)を開催しました。加えて7月28日には、札幌日本大学高等学校の現役・卒業生を史料館に迎え、蝉しぐれと木漏れ日を偶然の背後音光に、お昼前後に各30分ほど「朗読 夏の砦」を実演してもらいました。昨年フランスで実施した「辻邦生―パリの隠者」展を、日仏会館との共催で幸いにも今秋再現できることになり、後援・協力を賜る関係各位に感謝申し上げます。

(史料館長・坂本孝治郎)

辻邦生展開催に寄せて
～辻先生と私と日仏会館と～

公益財団法人 日仏会館理事長・学習院大学名誉教授 福井 憲彦

セーヌにかかるビルアケム橋のたもとに近く、パリ日本文化会館を会場にして開かれた「辻邦生―パリの隠者」展は、学習院大学史料館にとって最初の海外展示でした。多くのフランス市民が来訪してくれた展示は、日本とフランスとの双方をこよなく愛し、その歴史と文化に深い思索をめぐらした多くの小説を我々に残してくださった辻先生に、とてもふさわしいものとなったようです。私は用事があってパリに出向いていたのですが、展示までは滞在できず、地団駄を踏むとはこのことかと。

今回、日仏会館で開催される「凱旋展示」をじかに見られることは、うれしい限りです。学習院大学の学長を任期満了で退任した後、私は思わぬ形で、日仏会館の理事長を非常勤で務めさせていただくことになりました。巡り合わせですね、日仏間の深いところからの相互理解に心を砕いておられた辻先生を偲んで、日仏会館での展示をしたいとの意向を史料館が示された時、私がたまたまそれを支援できる位置にいたことになります。

私が、初めて辻先生にお目にかかったのは、1988年2月19日のことでした。なぜ正確に言えるのかといえば、初対面の私に先生は、その1月に出たばかりであった「ある生涯の七つの場所」の最終巻『椎の木のほとり』を署名入りで下さったからです。私は、その新学年から、学習院大学文学部史学科に専任教員として赴任する予定になっていました。辻先生は当時のフランス文学科教授ですから、学科こそ違うのですが、私がフランス近代史を専攻している(当時はまだ若い)歴史研究者であることをご存じでした。ご存じどころか、会うなり、採用人事であなたの仕事を読ませてもらって面白かった、と切り出されたのでした。私は恐縮仰天しましたが、その後も辻先生は折に触れ、文学と歴史学の歴史に対するベクトルの違い、といった議論を私にしてくださり、その違いを面白がっておいでだったように思います。先生の名作の一つ『安土往還記』についても、たいへん面白いエピソードを愉快そうに話してくださいましたが、ここでは余裕がないので、いずれのことにいたしましょう。辻先生は、1995年になさった史料館講座「歴史小説と歴史資料――『西行花伝』を中心にして」が明示しているように、素敵な語り手でもあり、素晴らしい学術の作法を備えておいでだったということを、最後に付言させてもらいます。